

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 草本 晶 会員数 約470人)

T E L 03-5950-1147

1 前 文

(本試験の評価書に同じ。)

試験のバランスを見るために、追・再試験問題は同年度の本試験と比較する。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

大問の構成(大問1～6)、出題形式、総解答数(48)、配点とも、本試験と同じであるが、総設問数は本試験に比べ、1題少なくなった。昨年度の試験に比べ、発音・アクセントを問う問題が出題されず、文法知識を問う問題が大問1と大問2に縮小された点も、今年度の本試験と同様である。

追・再試験で扱われた長文のテーマとジャンルは、大学生YukaとIchiroが、ブレーメンの大学で行われる文化ゼミナールに参加するため、ドイツ語教員(Herr Yilmaz)に事前に相談し、さらに文化ゼミナール参加後の感想を3人で話し合う会話(大問3)、日独企業に関するフォーラムで行われた司会者と経済学博士の質疑応答とメモ(大問4)、ワーク・ライフ・バランスに対するドイツの取り組みについての記事とグラフ(大問5)、美を様々なアプローチで解明するための研究所の紹介文(大問6)であり、本試験とほぼ変わりなかった。

ドイツ語総語数(のべ語数)は2,381、総語彙数(単一語の初出回数)は635である。本試験は総語数2,364、総語彙数730であった。問題文全体のボリュームは本試験に比べ同程度であるのに対し、語彙数は100語近く減少している。これは、昨年度の追・再試験の総語彙数(640語)と同水準であり、基本語彙を中心に出题されていることが伺える。さらに、試験問題の分量に関しては、本試験が24ページであるのに対し、追・再試験は23ページである。これは、本試験と比較して、追・再試験では内容理解を助けるためのイラストが少なかったためと考えられる。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典(見出し語6～8万語程度)で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は11語であった(★)。

★ ansammeln, berücksichtigen, ermöglichen, Großzügigkeit, Neugier, Partnerschaft, schwerfallen, streben, Wahrnehmung, weiterhin, zumeist

本試験では難語と思われる語は25語であったことと比べると、追・再試験は難語が少なかった。これらの11語は、一般的な独和辞典において見出し語として挙げられている、一般的な語彙である。難度が高い語には注が付けられている点は本試験と同様である。これらの難語は出現回数も1回のみであるため、多くの場合は意味が分からなくても解答には余り差し支えない。しかし、schwerfallen(下線部㊸)とGroßzügigkeit(下線部㊹)はそれぞれ大問3の間4、大問6の間3で設問の中で問われている語である。大問3のschwerfallenは、schwerの意味が分かれば解答は難しくない。しかし、大問6のGroßzügigkeitは、意味が分からなければ正解にたどり着くのは難しかったと推察される。

これらを総合的に考えれば、全体的な問題の形式は、本試験とほぼ同程度であるが、追・再試験

の方が、難語が少ないために取り組みやすい試験問題になったと評価できる。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 本試験と同様、昨年度までと大きく出題傾向が変わった。設問数(2)、解答数(11)、頁数(2)、配点(33)、及びテキスト中に[1]～[7]と下線を引いた単語(ア)～(エ)を埋め込んだ出題形式は、本試験と同様である。

テキストは、ドイツにある和食レストランの求人広告である。ワーキングホリデー・ビザを持つ人物がこの求人を目をとめたという背景が盛り込まれており、実際のコミュニケーションを想定した具体的な状況を設定するという出題者の意図が読み取れる。

問1 9つの語群から、テキスト中の[1]～[7]に当てはまる語を選ぶ。語群には、前置詞、過去分詞、話法の助動詞など、多様な語が含まれている。

[1]は、直前のein Restaurantにかかる関係代名詞を選ぶ。文章を読むために必要な、基本的な知識である。[2]は、先行詞andere Speisenにかかる関係文が「日本の日常生活の中で食される」と受け身になることに気付く必要があり、難度はやや高い。[3]は、auf der Sucheという慣用表現を知っていれば容易に解ける問題である。[4]は、dafürを受けてdass文が続くことに気が付くかが鍵となる。知っておいてほしい知識であり、出題の狙いも明確である。[5]は、schlagenの分離前つづり⑧vorを選ぶ。文の途中に挿入されたwenn möglichに惑わされず、枠構造になることを理解しているかが問われている。[6]は、副文中の語順を理解していれば、正答を選ぶことができる。[7]は、文末にある不定詞から話法の助動詞が入ることに気が付けば、難しくはない。

問2 テキスト中の下線を引いた単語(ア)～(エ)の語尾として適切なものを選ぶ。

[8]は、無冠詞の形容詞の語尾として①-eを選ぶ。形容詞の語尾変化が理解できていれば難しくはないが、間違いやすい部分でもあり、難度はやや高い。[9]は、定冠詞類solchの語尾を選ぶ。前後の文脈から2格になることに気が付けるかが鍵となる。[10]は、不定冠詞の変化を問う、ごく基本的な問題である。[11]は、Personの複数形として適切なものを選ぶ。冠詞類や形容詞の語尾変化と並んで名詞の複数形を問うのは、問題として妥当かどうか疑問に思う。

第2問 設問数(3)、解答数(6)、頁数(2)、配点(18)、及び、6つの選択肢から5つを選び空欄を補う出題形式は本試験と同様である。本試験と比較して、追・再試験では日常会話における基本的な表現を問うている。

問1 Leiderの後には動詞が置かれ、「何かをする人はあまりにも少ない」の表現を完成させるためには動詞tunが適切であることに気が付き、「～からである」を表現するためには並列接続詞dennが適切であると判断できれば解くことができる。

問2 vorbei istを用いることで「終わって」を表現することができ、「もはやほとんど～ない」はgar nicht mehrで表現できることを理解していれば正答を選ぶことができる。学習者が日常的に使用するドイツ語の表現を理解できているかを問う問題である。

問3 「他に」を表すためにaußerが文頭に置かれ、「地域産」の表現はaus der Regionが適切であることに気付けば正答を選ぶことができる。

第3問 連続性のある会話の解釈を問う形式であり、この形式は本試験と変わらない。設問数(7)、解答数(8)、配点(40)は本試験と同じであるが、頁数が本試験(7)に対して追・再試験では(5)となっている。これは、本試験では会話文とは異なるタイプのテキストが挿入されていたのに対し、追・再試験は会話文のみで構成されているためである。本文の内容は、大学生のYukaとIchiroがブレーメンの大学で行われる文化ゼミナールに参加するためドイツ語教員

のHerr Yilmazに事前に相談し、さらに文化ゼミナール参加後の感想を3人で話し合う会話である。設問では、発言で意図されている内容をドイツ語の選択肢から選ぶ形式が増えている。同じ形式の問題が本試験よりも1つ増えていること、日本語による選択肢を使用した設問が1つ増えたことにより、本試験と比較すると、追・再試験はやや解きやすい問題となっている。ただ、会話文において教員は学生に対してduを、一方、学生は教員に対してSieを使用しており、呼称の非対称使用がやや気になった。

問1 自然なドイツ語会話の流れを理解した上で適切な表現を選択することが求められる。

問2 本試験同様に、ドイツ語で意図されている内容をドイツ語の選択肢から選ぶ問いである。

下線部以降のYukaの発言を踏まえれば正答を導き出せる。

問3 会話文全体を丁寧に読めば正答できる。選択肢が日本語であることも踏まえるとそれほど難しい問いではない。

問4 問2同様、「下線部の発言で意図されている内容」に当てはまるものをドイツ語で示された選択肢から選ぶ問いである。前後の文脈を踏まえれば正答を導き出すことができる。

問5 YukaとIchiroのそれぞれの発言を丁寧に読んでいけば正答が導き出せる問いである。

問6 問2、問4同様に、文脈を理解しながら発言意図をドイツ語の選択肢から選ぶ問いである。下線部に後続するHerr Yilmazの発言では既に話題が変わってしまっているため、下線部前の内容を十分に把握している必要がある。

問7 本試験と同様に、会話全体の内容に合うものを2つ選択する形式である。会話を適切かつ丁寧に理解することができれば正答が導き出せる。2つの正答の選択肢はそれぞれ1つ目と2つ目の会話文の内容を反映し、また、YukaとIchiroの双方の体験について把握していることを求める良問である。

第4問 設問数(5)、解答数(8)、頁数(4)、配点(30)。フォーラムにおける専門家とモデレーターの質疑応答と、それに付随するメモを解釈し問題を解く出題形式や、プレゼンテーションを行う準備のために学習者が会話を聞き、メモを取るという状況設定は本試験と同じである。会話の内容について、本試験では医学博士による水の話であったのに対し、追・再試験では経済学博士による日独企業の話が展開された。会話の中ではどのようにドイツやドイツ企業で働くことができるかという話題も扱われ、ドイツ語学習者にとっては本試験より自身の将来を描くことができる身近な内容であると言える。会話の内容で使用されている語彙の難度も適切であり、各設問も複雑な内容ではない。メモの中の略語(dt, jp, GB, D, J)が何を指しているかは本文を読み終えてから語彙を紐づける必要があるが、日本とドイツ、イギリスであると関連付けるのは難しくないと思われる。全体の難度としては本試験より低かったと思われる。

問1 会話文とメモの内容を一致させることができれば、正答にたどり着ける。メモの zu wenig Personal は会話文の Problematisch dabei ist, dass Personal fehlt, メモの im Internet は会話文の auf Webseiten zur Stellensuche と関係し、メモの Vorteil: beruflich の部分では会話文で Vorteil として mehr Gehalt が最初に説明されていると気付くことができれば正答を選択することができる。

問2 メモで会話文の Die deutschen Firmen wollen zwar mehr Japanerinnen und Japaner anstellen の文を指していることに気づき、wollen の言い換えとして適切なのは brauchen であると理解する必要がある。学習者の語彙・表現の知識も問うている。

問3 メモのキーワードを会話文内で見つけることができれば比較的容易に正答を判断することができる。会話で Nicht sehr bekannt の後に Spezialtechnologien konzentrieren,

Treffer の前後では mehr Treffer als jedes andere europäische Land,そして Jobinterview の後に steigt Ihre Chance auf eine Stelle と説明されていることに気付き、その情報をメモとしてより端的にまとめるために必要とする語彙を判断しなければならない。学習者の情報をまとめて表現する能力が試される、よく練られた問題である。

問4 会話文と友人への質問、及び、解答内容を正確に読み取れているかを問うている。良問である。

問5 本試験と同様に、会話全体の内容に合うものを2つ選択する形式である。会話の内容を理解できていれば、正答を導き出せる。

第5問 設問数(5)、頁数(5)、配点(35)で、本試験(設問数(6)、頁数(4)、配点(35))より設問が1題少なく、頁数が1頁多い。頁数が増えた要因は、問題中にグラフが3つ含まれているためだと考えられる。

出題は、ワーク・ライフ・バランスの改善に対するドイツの取り組みについて述べた文章と、これに関連した3つのグラフで構成される。昨今頻繁に議論されているテーマであり、受験者の多くが一度は触れているであろう、なじみのある話題である。身近なトピックではあるが、女性側の問題だけでなく、家庭での時間を増やそうとする男性が直面する問題にも言及し、事態の解決には政治や社会の関与が欠かせないと結論付けているところに、論説文としての工夫が感じられる。

文章は179語と大変少なく、昨年度より大きく語数が減った本試験の224語よりも、更に短い。一方、本試験では1点だった図表が、追・再試験では3点と大きく増えている。文章が短い分、これらのグラフからしっかりと情報を読み取ることが求められる。

問1 文章のテーマとして適切なものを選ぶ。本文中のWork-Life-Balanceが、選択肢ではdie Balance von Hausarbeit und Berufと言い換えられていることに気が付くかがポイントである。

問2 グラフⅠとⅡについて、内容としてふさわしいものをそれぞれ選択肢から選ぶ。グラフⅠは、家事や買物といった家庭内の仕事を男女のどちらが負っているかを示しており、迷うことなく③「家庭における男女間の仕事の分担」を選ぶことができる。一方、グラフⅡでは貧困や年金、収入など金銭面の問題に当てはまる男女の割合が記されているが、正答は⑤「女性の経済的困難」であり、やや不正確な印象を受ける。問2の出題文にある「Diagrammの表している内容」が、一方では「何のグラフか」を意味し、他方では「何が読み取れるか」を意味しているように思われる。消去法により正答にたどり着くことはできるが、グラフごとに異なる解釈が求められるため、受験者が混乱する可能性があるのではないだろうか。

問3 FelixとMariaの発言を読んで、それぞれ3つのグラフから最も関連性の高いものを選ぶ。両名ともイラストが添えられており、性別や世代を推測することができる。Felixは、男性であることやwenig Zeit für die ersten beiden Kinderといった発言から、育児休暇について話していることを読み取り、Elternzeitの男女別取得者数をまとめたグラフⅢを選ぶ。Elternzeitには注が付いているため、発言の内容が分かればグラフを選ぶのは難しくない。これに対して、Mariaは女性であること、70歳という年齢、in Teilzeit arbeitenやwenig Renteといった発言から、金銭面について述べていることが読み取れ、比較的容易にグラフⅡを選ぶことができる。

問4 選択肢の中からドイツ人男性の傾向として適切なものを選ぶ。本文の第三段落を正しく理解しているかが問われている。

問5 文章、グラフのいずれにも書かれていないことを選択肢から選ぶ。選択肢は日本語で書

かれており、一つ一つ文章やグラフと照らし合わせながら該当箇所を見つけていけば、正答にたどり着くことができるだろう。

第6問 設問数(6)、解答数(8)、頁数(5;うち、本文テキスト1頁半)、配点(44)で、量的には本試験とほぼ同水準である。なお、冠飾句(本文5行目 jedes von Menschen gemachte Objekt)や現在分詞(同15行目 bewegende Filmmomente)など、本試験では出てこなかった文法事項の知識が必要となっている。

問1 「第一段落が本文中で果たしている役割」についての理解を問うている。比較的容易に正答を選べると思われる。

問2 誤答4つは消去できるので、正答2つを選ぶことには問題ないと思われる。なお、④は、たしかに第三段落の1行目に mit neuen Methoden とあるので、「他にはない新しいメソッド」、ひいては(④で言われている)「哲学とも違うメソッド」ということになり、正答になる。論理思考が問われており興味深い。ただし、言われているのは哲学とだけ一線を描くメソッドであるわけではないので、auch mit anderen Methoden als die Philosophie のように „auch “ を入れた方が良かったのではないかな。

問3 第五段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。Großzügigkeit が、この段落2行目の Spiel と関係し、「遊び心」「懐の広い」のような意味で使われていることに気付く必要がある。難度は高めであるが、内容理解を問うのに適切な問いである。

問4 第六段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。難度は妥当である。

問5 内容も難度も適切な設問であると言える。

問6 テキスト全体の理解度を測るために文章内容に合うタイトルを選ばせる良問である。ただし、最後にタイトルを選ばせるのであれば、リード文に「次の文章は・・・である」などと書くことは避けるべきである。この設問では「次の文章は、ドイツのある研究所を紹介するものである」とリードされているが、「ある研究所」の取り組みはその中の一例に過ぎず、「ある研究所を紹介」したテキストではない。こういうことを避けるためにも、リード文はシンプルに「次の文章を読んで、後の問いに答えよ。」で良い。

3 総評・まとめ

今年度の追・再試験は、問題の形式面では本試験と余り変わらないものであった。長文で扱われているテキストのジャンルも本試験とほぼ同じである。長文のテーマは、大問6に関しては追・再試験の方が抽象的で難しいテキストが扱われたが、全体として見れば、高校生・大学生になじみのある題材が扱われており、本試験と比較して取り組みやすくなっている。問題の難度に関しては、昨年度よりも多くドイツ語を読ませるという点において、本試験と追・再試験で余り差はないが、追・再試験では難語や専門用語が少なく、基本的語彙を使用しているため、平易になった印象を受けた。出題形式に関しては、ドイツ語を丁寧に読んでいけば解答できる問題もある。しかし、発言の意図を尋ねたり、ドイツ語で表現されているものを解釈したりすることで、ドイツ語だけではない能力を求める問題が出題されるなどの工夫があり、必ずしも簡単に解けるものばかりとは限らない。これらの難度の差は、やはり追・再試験の方が本試験よりも解きやすいと評価せざるを得ないが、本試験の受験者、追・再試験の受験者、どちらにとっても著しい不利益をもたらすほどのものではない。

今後も、英語以外の外国語で共通テストを受験する学習者の外国語運用能力や思考力を幅広く問う出題を期待したい。